

って商店街の人たちと何かしようということになったのですが、当時も議論になったのは、外国人の訪問者がすごく多いという点です。当時、キディランドの売り上げの6割が中国人だと言ってたように記憶しています。それが7年か8年前なのでいまはもっと増えていると思います。

東日本大震災のとき、商店街では電車で来た人の数をカウントしていましたが、どうも6万人ぐらいが表参道にいたようです。そして電車止まってしまい帰れなくなった人がでた。あの辺りは青山学院大学があるので、キリスト教の精神ですばらしくて、すぐ大学を開放し、正式な数は覚えていませんが、1万人近くの人を受け入れたと聞きました。やはり地元の人はよく知っていて、青山学院大学は災害のとき受け入れてくれたとか、そういう記憶があるようです。

参考になるかなと思って持ってきた、7年くらい前に作ったこの防災マップを少し紹介します。外国人や遊びに来ている人が多いということで、電車が止まって帰れなくなるよ、どうする？ということを、どのように伝えるのか考えて作りました。うちの学部はグラフィックデザインの先生もいますので相談し、こういう漫画にしようということになりました。それから英語も入れようとか、ということでこんなマップを制作したわけです（図5.2.1 参照）。

当時を思い出すと、原宿のあたりで就職活動中に地震に遭ってしまった学生がいました。ファミリーレストランにいたようですが、巨大なエアコンが落ちてきたりらしいです。震度5強レベルだったかと思いますが、それでとっさに隠れたらしいんですけど、その直後にエアコンがドカンと落ちてきて、もしかしたら死んでたかもしれないって話を聞きました。そんなエピソードにもとづき、この漫画のキャラクターの頭にポコッとなんか落ちてくるところを描きました。そのほかにも、みんなで助け合いましょうということを描いています。

裏側には地図があります。渋谷区にも防災地図がありましたら、地元民が行く避難場所も、帰宅困難者支援施設も示されていて、それでどっちに行ったらいいかわかんない、となるわけです。実際にやってみると「来ちゃダメですよ」って書いてあったりするわけです。非常に難しい地図だったので、それならばということで帰宅困難の人だけの地図にすると、そしたら空白だらけになつたんです。じつはこの後、地区では協議会ができて話が進んでいきました。もっとたくさんこういう施設を増やしたいねっていう話になりました。先ほど村上先生のお話にあったように、みんながなかなか協力してくれるわけではないので、実際は思うように対策に進展がないのが実情です。



写真5.2.3 佐藤 慶一氏（左から一人目）

大学で取り組めることというのは、こんな地図を作つてみたり、訓練もそうですが、情報を調べて皆さんにお伝えするということがあります。このエリアだと、やはり地域特性というか、会社員とか、古本を買いに来ている人もいるし、そういう人たちに対して情報提供をしていくという活動もあり得ると思います。



図 5.2.1 Bosai Manga Map（表参道・原宿・竹下）の表紙と漫画の一部

＊小林 ありがとうございます。じつはいまお話しいただいた防災マップは、先日おこなったミーティングでお聞きしたものでした。ぜひともデータの共有をとお願いしたところ、本日は貴重な在庫をご提供くださいましたという経緯があります。

◆佐藤 この防災マップはたしか相当な量を刷りました。それで店舗に置いたり、観光協会に置いたりしたのですがさすがに全部なくなってしまいました。今日は研究室にあった残りを持ってきました。貴重なやつです。もうないです。

＊小林 ありがとうございます。実際いま話題にあがったように、いざ地図に落とし込んで気づいた空白地とか、要するに可視化することで明らかになる問題というのがあると思います。そういった意味では、今回 SKV の学生が千代田区の特性について盛り込んでみようとして帰宅困難者カードを作りましたが、その時に、改めてこんなこと也有ったんだという気づきがあったら教えていただけますか。

★SKV 山崎 気づきとしては、駅が近くにあるということと会社員が多いということです。カードを作る最初の段階で、どんな人がいるか SKV メンバーに挙げてもらいましたが、やはり会社員という答えが多かったです。犬の散歩をしている人という意見もありましたが、地元住民というのではなく、昼間人口、通勤者が多いエリアだ地域だという地域特性を改めて実感しました。

＊小林 昨今のインバウンドの回復という状況のなかで多言語化や多文化化という側面もあるかと思います。そのあたり、たとえば大学で外国語や異文化など学ぶうえで、どのような対応ができるだろうとか、どのように知識を活用できるだろうなど、そういういた話はありましたか。

★SKV 山崎 カードを作る時点で、日本語を話せない外国人観光客というのを盛り込みました。そして、その場合に私はそれにどうやって対応していくのだろうか考えました。たしかに携帯電話を使うことができれば、翻訳アプリなどでいろいろな言語に対応できるのかもしれないですが、携帯電話がいつまでも使えるとは限りません。この点については今後の課題の一つに考えています。

＊小林 本日のシンポジウムは「大学の学びと地域防災」をテーマとしています。そこで、廣井先生、村上先生、佐藤先生に伺います。これまでいくつも具体的な実践に取り組んでこられたなかで、地域防災に関する大学の役割というのは人材育成なのか、あるいは一時滞在施設なのか、そのあたりについて、今後の展望も含めてお話しいただけますか。

●廣井 はい。2つあると思っています。ひとつは、災害時を考えることで、地域内のつながりができるという点です。先ほど村上先生のお話もありましたように、災害時にはいやでも企業と大学が連携しなければならなくなります。そうしないと回らないのです。ただし、平時に企業と大学の連携ってなかなかできないわけですよ。事業者と大学が事前につながっている必要がある、つなぐ必要があると分かっていても、事業者も大学も忙しくてなかなかつなぐことができない。そこでやはり学生ってすごく重要なんですよね。学生ってもう、特権階級みたいなもので、学生のためだったら、わりとみんな協力するんです。私みたいなおじさんですね、どつかの企業に行って「教えてください」って言ってもたぶん教えてくれないんだけど、「大学の研究ゼミです」あるいは「卒論です」って教えてくださいって言ったら、じゃあここの部分はさすがにマスキングしてほしいけど、教えてあげるよ、と。未来のためにいろんな企業が協力してくれる。みんなが相手にしてくれるという、学生さんのいわゆる特権をぜひ活かしていただいて、そうした、企業と大学をつなげる一つのハブになっていただきたいと思います。

もうひとつは、ぜひ外国人の方を呼び込んでいただきたいという点です。やはり大学って留学生が結構いらっしゃいますよね。多様な人材が揃っているということが大学の強みなんです。外国の方って防災にとって重要になります。なぜ重要なかというと、これは都市計画の話になりますが、アメリカのトロント大学のリチャード・フロリダという研究者がある研究をしていました。イノベーションが起きている都市というのは、いわゆる多様性に富んでいる都市だという研究です。外国人が活躍していたりとか、芸術家がいたりとか、LGBT の人がいたりとか、そういう人たちを受け入れる寛容な都市は、実はイノベーションが起きやすいと言われています。防災ってじつはあまりイノベーションが起きません。というのも、災害が起きないと改めて問題を考えるということをしないので、防災の世界って全然イノベーションが起きないです。20 年前の訓練と同じ訓練をしている地域がいっぱいあるほどです。そこに大学ならではの、千代田区ならではのイノベーションをうまく起こす。正しい取り組みや効果の高い取り組みをするために積極的にイノベーションを起こす。そうすると、やはりいろんな見方をする人、例えば、芸術家肌の人とか、外国人とか、あるいは若い人、女性、教職員も含めるいろんな人がいます。大学というのはそういう人材が揃って

いる場です。だからその大学の強みを生かすためには、皆さん組織の中にいろんな多様な人を入れ込み、この問題をどう考えるかということを再考してほしいと思います。そうすると、なにか新しいイノベーションに結びつくようなアイディアが出てきて、そして、一歩前に進むことができると思います。そこが大学の強みのふたつ目だと思うんです。それをぜひとも実行してほしいと思いますね。

▲**村上** 私も同じ考えです。避難所の取り組みをやっていて、やはり多様性というのは非常に重要だと感じます。そうしたこともあるって、私はいま手話を習っていますが、いろんな方の立場から考えないと避難所の環境は良くならないと思います。目が不自由な方に参加してもらわないと、目が見えている人だけで考えても、決して目が不自由な方のことはわからない。避難所の利用計画を考えるときに、たとえばトイレの近くに目が不自由な方の部屋を配置したほうが良いと思われるかもしれません。ところが、目の不自由な方に言われたのが、私は点字ブロックがないからトイレに行けないということです。先ほど廣井先生がおっしゃられたように、多様な視点の必要性を感じます。LGBTの方の視点で見ないとわからないこともあります。多様な方がいるのが大学だと思いますし、ぜひとも進めていっていただきたいです。

本学も新宿に位置していますので、地域防災拠点としての役割を果たしていこうとトップダウンで取り組んできました。「ものづくり」「ひとづくり」「ことづくり」と言いますけど、やはりそれをできるのは大学なのです。専修大学もこの場所にあって、学生さんがいるからこそできることがたくさんあるはずです。教員だけでは絶対できないです。

◆**佐藤** 今日はSKVの皆さんがこうやって集まり、訓練をやっていて本当に素晴らしいと思います。企業の人だけの難しい会議とは異なり、やはり学生がいると雰囲気が違う。未来のために頑張ってやろうという感じになるので、学生の存在は地域にとってとても重要なと思います。それから学びという点でいうと、防災のことはなにも特別なことではなく、自分がいま勉強していることと関係すると思います。神田キャンパスの場合、法学部だと法律とか、商学部であればビジネスとか、あるいは国際コミュニケーション学部だと多文化間の交流とかと結びつきます。ふだん勉強している中でも「あ、これは災害と関係しているな」のように学びにつなげたり、あるいは学んだことをまた防災の活動につなげたりできるでしょう。そのようにできると、より活動の中身が出てきまし、いやらしい話、就職活動でもうまく活かされるのではないかと思います。

＊**小林** いまの話で「つなぐ」「結びつける」といった重要なキーワードが出たように思います。また、多様性を受け入れる機会をどれだけ作り上げていくかという点において大学が非常に重要な拠点となるというご指摘がありました。これについて、例えば、学生の立場から、学生の視点か



写真 5.2.4 村上 正浩氏

ら、あるいは、来春には社会人としての立場から、山崎さんと江波戸さんはどのように感じ、どのようにご自身と結びつけますか。

★SKV 山崎 大学の役割に関して言えば、私たちの SKV としても、今後、提案できることや関わることは大いにあると思います。そのなかで、また新たな視点で活動に活かしていくこともできるように考えます。私は、来年からは社会人ということで、ホームセンターに就職するのですが、ホームセンターという場所は、災害発生時に必要となるものが多く揃っているところです。今日のお話というのは、そういう事態での対応について強く考えさせられました。

☆SKV 江波戸 つながりという言葉で私が感じたのは、やはり専修大学で完結するのではなく、もっと他の大学の学生との交流が必要だと思います。大学生活は残り 3 ヶ月しかありませんが、他の大学の方々と一緒に防災知識の向上に取り組むことができる場があればよいと考えます。

*小林 本日はちょうど千代田学事業の全体代表者である東京家政学院大学の酒井先生も会場にいらっしゃっていますけれども、この千代田学事業のテーマは「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化」です。まさにいま江波戸さんが言及されたとおり、学内の結束強化も良いのだけれども、大学間での結びつきを構築できるかどうか、これが大きな課題かと思います。その点について先生方に質問したいのですが、学内だけでもなかなか難しいのに、大学間での連携、大学と企業の間での連携となったとき、どういった問題があるでしょうか。

▲村上 私は、東北福祉大学・神戸学院大学・工学院大学による「TKK 3 大学連携プロジェクト」を 2009 年から取り組んでいます。この取り組みは、広域での大学間連携によって防災・減災を中心とした学生の社会貢献教育を行うことが目的です。現在も継続しておりますが、たとえば 2009 年の開始当初からオンラインで学生に授業を遠隔配信するなどしてきました。そうした学生は、所属の大学でやってない授業を受講することができます。たとえば、本学には社会貢献や国際協力といった授業がありませんので、そうした授業を 2 大学から配信してもらって本学の学生が受講しています。

東日本大震災が発生した当時も、3 大学の連携で学生たちはボランティア活動に臨みました。とくに、津波にのまれ汚れている写真の修復プロジェクトは大きな意味を持つものでした。東北福祉大学は被災した大学なので、現地の学生ボランティアを通じていろいろなニーズを拾い上げてもらい、離れている遠隔の大学で後方支援をしていくというやりかたです。写真を洗うという作業だとたいへんなので、全点をデジタル化しました。とくに建築の学生はフォトショップなどのソフトを使い慣れているので、デジタル処理をして写真を修復するという取り組みを、工学院大学と神戸学院大学で分担して進めました。

このような取り組みは一つの大学ではできないことでした。互いの強いところを活かす、文系と理系の融合のなかで互いの強いところを活かしていくことが有効であると経験から学びました。3 大学が離れているために同時に被災することは考えにくく、どこかの大学が被災したときに支援することもできます。たとえば、東日本大震災が発生したときも、私たちもすぐに東北福祉大学

に支援に入りました。普段から使っていた遠隔のシステムを、直後に神戸学院大学とつないで支援体制を確認し、すぐに東北福祉大学に支援に入りました。

こうしたことができるは、やはり大学間が互いに連携するメリットだと言えます。学生ボランティアについても、理系の本学の学生にはほとんどノウハウはありませんでした。ところが、互いに勉強していくことでそのノウハウを学びました。他方で、建築の学生がなにも泥かきをする必要はなく、これぞの専門性を活かせることをすればよいと思っています。建築の学生であれば、普段から段ボールなどで模型を作り慣れているので、避難所の環境改善のために、その場で実測して段ボールをカットし、仕切りやテーブルなどを作製することは慣れたものです。東日本大震災のときは、3大学が連携してそれぞれの強みや専門性を活かし、ボランティア活動を行うことができたのは良い経験でした。大学間連携することのメリットだと思います。

＊小林 なるほど。「TKK 3 大学連携プロジェクト」のお話は大学間連携の成果としてとても興味深いと思います。その点について、大学間のネットワークに関して、佐藤先生はどのように考えていらっしゃいますか。



写真 5.2.5 パネルディスカッションの様子

◆佐藤 そうですね。千代田区には「千代田区キャンパスコンソ」があります。今日は専修大学を中心で開催していますが、こういうイベントに他大学の学生や教職員が多く来れるような、そういうイベントの組み方が必要だと思います。それは千代田区にかぎる必要もないですが。先端的な取り組みやユニークな取り組み、新しい取り組みをしているところとか、先ほどの新宿の工学院大学の取り組みのように、いろいろな取り組みがあります。私が言及した青山学院大学の災害時対応のほかにも、熊本地震の際には、熊本学園大学は福祉避難所としてとても頑張って、障碍者の方を受けたりとか、いろいろな工夫をされています。いまは能登で、学生がさまざまな活動に従事していると思いますが、そこでどのように学び、自分たちをどのように活かせるかと考えるわけです。本学の場合、国際コミュニケーション学部もありますので、海外のいろんな取り組みを学んだり、交

流したりできるでしょう。日本はやっぱり災害大国と知られていますから、国際交流の枠組みで海外の人と話し合うというのも良いと思います。そういう意味では、防災をきっかけに大学連携の機会を作っていくと、皆さんのネットワークがより広がっていくと思います。

＊小林 たしかに言語や文化が異なっても地球上のどこでも災害は発生するという意味では、防災をきっかけとする国際交流は今後の大きな課題だといえます。

●廣井 村上先生と佐藤先生のお話を聞いてだいぶ頭が整理できました。たしかに村上先生がおっしゃるとおり、それぞれ大学の強みとか専門性が違うと思います。ただし、知識ではなくて、むしろ大学の思想や考え方というのはずいぶん違うと思うんです。たぶん、学生の皆さんも本学の建学の精神みたいなものを学ばされたと思いますが、他大学のそういうことって知らないですよね。そこで、ぜひ考え方を学び合ってほしいと思います。たとえば、安全とは何か、あるいは、学生生活をこれからどうするべきか、人生はどう生きるべきかのように、それらの思想の部分をきちんと皆さんの中に確立するのが、とても重要な大学の4年間での仕事だと思います。知識は、いまではどこでも転がっているわけです。どちらかといえば、その根本的な考え方を学び合うことによって確立してほしいです。おそらくそれは、人生をこれから豊かに過ごすために、絶対的に、効果的に機能するはずです。10年後、20年後に、いわゆる思想の部分をきちんと共有し合った仲間と、もしかしたらどこかで再会するかもしれません。あるいは、困ったときに、若いときにいろいろ心を開いて議論した相手と相談する機会があるかもしれません。佐藤先生がおっしゃるように、ネットワークとしてそれを活かしていただきたいと思います。防災に関する細かい豆知識よりも、そっちのほうが学生の皆さんのが学ぶ意味では重要かなと。それをうまく防災を使って皆さんでコミュニティをつくってほしいと思います。

◆佐藤 専修大学は「報恩奉仕」ですね。これはもう防災とバッヂリとマッチします。

●廣井 そういうね、他の大学の建学の精神とか、そもそも思想の考え方って知らないことが多いです。でもそれはとても重要なんですよ。

＊小林 ありがとうございました。非常に内容の濃い、さまざまなテーマや課題に結びついたパネルディスカッションになったと思います。本日は、廣井先生、村上先生、佐藤先生、そして、学生ボランティアのSKVの皆さん、今日はご参加ありがとうございました。議論のポイントとしては、イメージ力を鍛えるということでしょうか。そして、大学が、つながる場、結びつける場、そして巻き込む場というような、私たちがすぐにでも取り組めるような課題が挙げられたと思います。本日の議論が今後の取り組みのヒントになれば幸いです。

まとめと今後の展望



まとめと今後の展望

令和6年度は、「規模災害時における学生ボランティアの育成と、ネットワーク化に関する研究」と題して、学際的な共同研究事業をすすめ、下記の3点の成果を得ることができた。

第1点としては、大規模災害時における学生ボランティアの育成を試み、大学を含め、千代田区の社会資源を巻き込んだ教育内容を展開し、その効果を解明したことである。特徴的な大学を抽出しながら振り返ってみる。

法政大学では、法政大学の2024年度「社会連携フィールドワーク（ベーシック）」の一環として、また、千代田区キャンパスコンソの単位互換科目として、本共同研究事業の研究者が講師とした関わり実施された。大規模自然災害発生時の大学キャンパスにおける帰宅困難者支援を目的とし、トイレ実習、非常食の試食、救命救急講習を含めた模擬的な避難生活体験が行われている。それによって、災害発生直後における避難者受け入れ施設の運営に必要な知識と実践を学生が体験し、大学や地域社会における危機管理能力の向上に寄与し得る学生ボランティア意識を醸成するとともに、ボランティア育成プログラムの開発に資する基礎的資料の収集を意図していた。帰宅困難者受け入れ施設運営ゲーム（KUGゲーム）を用いて、昨年度の研究で作成した「帰宅困難者受入準備用のアクションカード」を活用するとともに、グループワークを通じて課題の発見と解決策の模索が行われた。多様な連携機関との協力を通じて、災害時におけるITツール活用や支援方法に関する講義およびワークショップが実施されると共に、アプリを用いて参加学生の健康情報を収集し、災害時における健康管理の課題も抽出されていた。

**①大規模災害時に対応する
学生ボランティアの育成
その効果の解明
—法政大学—**

大学生の3日間の防災教育プログラムを実施。
○大規模災害に関する知識を深める講義
○避難所運営ゲーム（KUG）
○災害現場を想定した疑似帰宅困難者支援施設でのロールプレイ（受付担当・避難者役）
+グループワークで問題点や改善策を議論

必要な意識・知識・技能をどのように習得するか？

疑似帰宅困難者の受け入れ側を演じた学生
らの作戦会議

帰宅困難者支援施設
入口前の受け入れ時
を模擬体験

二松学舎大学では、神田・神保町地域の災害と復興をテーマに、「文房堂」と「東明館」の2つの千代田区における災害関連の歴史的な出来事や施設について学びながら、ミニワークショップを通じて、ウィキペディアの記事執筆を作成し、歴史的意義が掘り下げられた。学生スタッフが主体的にトピックの選定や街歩きのルート策定を行った点が特徴的である。単なる記事執筆にとどまらず、Wikipediaの記事を執筆することで、防災や災害の歴史に関する学習の機会を創出することになっている。災害と復興というテーマを通じて、地域の過去を振り返るだけでなく、現在の都市環境における防災の視点を考え、社会に還元する場として大きな意義を持つことを共有することができていた。

東京家政学院大学においては、管理栄養士養成課程の必修科目「栄養教育実習」において、大学生による災害時の栄養・食支援のための教育・評価設計を行っている。動画コンテンツや紙面パンフレット教材の作成を通して、栄養教育の計画と評価の方法を具現化していた。当然、管理栄養士という国家試験の受験に必要な知識やスキルの習得を、防災をキーワードに実現した形となっている。

いずれの大学においても、各大学での学生ボランティアの育成は、各大学での授業と別に行うのではなく、防災教育の趣旨と、それぞれの教育の特徴を重ねた形で実現された。こうした展開は、それぞれの専門課程の教育内容に特色を加えることにもつながることが検証されたことにもなる。

第2点として、学生・職員・地域が連携した帰宅困難者支援施設運営ゲームの実践と評価を試みたことである。

各大学において、それぞれの強みを活かした形で、帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUGゲーム）を含めたワークショップが実施された。プログラムに参加した学生からは、「実際に運営側として被害者を受け入れる演習ができた。チーム全員で話し合いをし、試行錯誤するのが楽しかったし、とても考えさせられた」「KUGゲームで役割分担をするときに誰が何をやつたらいいのか考えて、自分の役割をしっかりと取り組むことができた」「意見を言いやすいような空気づくりがメンバー全員でできていたことがすごく良かった」等の感想が寄せられ、災害に備えて、KUGゲームを体験することが他者を支援することや、ボランティア意識の向上に繋がることが確認できた。

専修大学は2023年11月に千代田区キャンパスコンソに加わり、専修大学版のKUGの制作が最優先課題となった。10年以上の活動の蓄積を有する学生ボランティアサークルSKVの幹部メンバーの意見聴取を踏まえつつ、神保町の地域特性を反映させたバージョンの作成に取り組んだ。具体的には以下が盛り込まれた。①帰宅困難者カードの改編・追加（昼夜間人口の差が激しい千代田区の特性を考慮し、昼夜で異なるバージョンを作成）、②イベントカードの改編・追加（昼夜で異なるイベント発生を想定）、③帰宅困難者およびイベントカードに「必要とするボランティア人員」の数値を追加記載した。これは、帰宅困難者のサポートやイベントへの対応に割くことができるボランティアの数が有限であることの意識づけを目的としたルール「アクションコスト機能」の追加を意味した。さらに、2024年12月21日（土）と同22日（日）に宿泊を伴う避難訓練が専修大学神田キャンパスで実施された。21日の午前の部には、二名の講師による講演のほか、防災の専門家にくわえて学生ボランティアサークルの代表が参加するパネルディスカッションが行われた。午後の部では、防災備蓄倉庫および帰宅困難者一時避難場の見学に続いて、専修大学版のKUGゲームが実施され、新たな展開をもたらすことになった。

今年度5つの大学（短期大学を含む）で行われたKUG実施後のアンケート結果、KUGに関する評価項目、図上演習による評価項目の結果から、これまで本事業で実施したKUGと同様の評価が得られていた。一方、運営・進行上で分からぬ点や改善点について、多くの意見が得られた。



第3点として、昨年度まで帰宅困難者支援施設運営ゲームを実施する中で、実際の対応においては、周辺機関との連携や情報交換のためのネットワークづくりが必要であることを痛感した。そこで、今年度は、各大学間をつなぐネットワークづくりとその効果を検証することが一つの課題であった。

各大学間をつなぐネットワークの具体的なプラットフォームとして「Discord」というコミュニケーションサービスが選択された。本研究事業の大学がメンバーによって、「千代田区コンソ防災ネットワーク」という名称のサーバを立ち上げた。それによって、KUGゲームのリアルタイム共有、振り返りの集約、大学間の比較が可能になるといった効果が確認された。特に、KUGに参加していない他大学の進行状況を把握できる点や、各大学の知見を蓄積・共有する仕組みとして機能しつつある点は、今後の防災ネットワークの発展にとって重要な基盤をつくることとなった。一方で、情報整理の課題、実際の災害時の運用に向けた検討といった改善すべき点も明らかになった。

5大学で行われたKUG実施後のアンケート結果をみると、約7割がボランティアネットワークへの参加意思を示していた。参加してみたい理由の中に、ボランティア同士での交流や他者とのコミュニケーションに積極的な姿勢が見受けられた。また、情報共有の便利さや有効性を見出している者が多くみられた。一方、参加したくない者の中にはオンラインでの参加に対する抵抗感や、オンラインよりも対面によるコミュニケーションを重視したい考えを示す者がみられた。今回行われたKUGの中でもオンラインネットワーク上での情報共有を試験的に行った大学もあり、KUGの中でオンラインネットワークの実践例を示していくことも有用であり、アナログな図上演習にDXを今後どのように取り入れていくかが今後の課題である。

③各大学間をつなぐネットワークづくりとその効果の検証



Discord: インスタントメッセージ・ビデオ通話・音声通話等のコミュニケーションサービス。ユーザーは2024年時点でおよそ6,000万人近く。

千代田区コンソ防災ネットワーク

■ Discord導入の目的

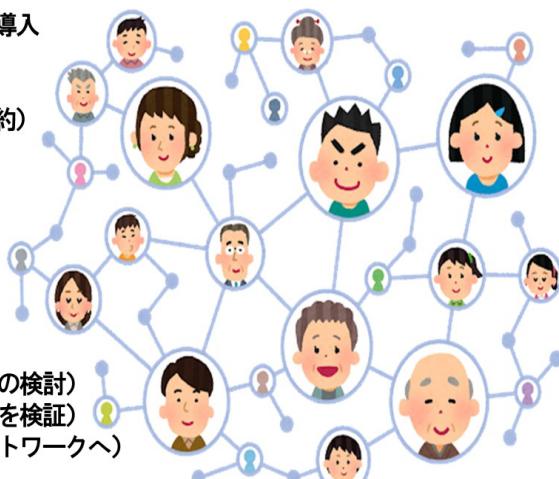
- 構造化された形で情報を蓄積できることから、Discordを導入
- リアルタイム情報共有の強化
- KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）の成果の共有
- 防災関連情報の蓄積・共有（KUGの記録、防災情報を集約）

■ 運用成果

- ✓ リアルタイムでの情報共有が可能に
- ✓ KUGの振り返りを蓄積・比較できる仕組みを構築
- ✓ 大学間の防災協力体制が強化

■ 課題と今後の展望

- 情報整理の仕組みの整備（フォーマット統一やタグ付けの検討）
- 災害時の運用テストの実施（通信環境や情報整理の課題を検証）
- 自治体・防災団体との連携強化（より実効性の高いネットワークへ）



以上、今年度、それぞれの大学で、千代田区の地域組織・団体と交流を深め、KUGゲームを防災教育の質的向上に資する教材として活用することで、学生ボランティアとしての心構えや対応力を養成することにもつながったと捉えられた。学生は多様な避難者および避難所で生じる問題を想定し、臨機応変に対応することの困難さを自分事に置き換え、防災行動に対する複眼的な目を養うことでサステイナブルな防災意識向上に資する大学教育の在り方を学生とともに探求することができたことが大きな成果である。

大学は、学生が、教職員が、そして地域資源がつながる場、結びつける場、そして巻き込む場としての機能を有している。災害といった非日常に目を向けることは、一日一日「安全とは何か」「学生生活をこれからどうするべきか」「人生はどう生きるべきか」、これからの、そして今の生き方の思想を確立することにつながる。学生は千代田区に所在する大学において、人生にとってとても重要な4年間を過ごすことになる。バラバラな知識はバーチャルな世界の中で多く存在する。是非、その根幹を学び合う場をつくることが千代田区キャンパスコンソの目的であり、これから的人生を豊かに過ごすために、不可欠な舞台であるはずである。本研究の成果は、千代田コンソの各大学と共有し、防災教育の改善のヒントとして各大学の防災教育を推進し、ひいては、災害に強い大学・災害に強い地域の具体的なモデルとしての千代田区の実現にも一石を投じたことであろう。

謝 辞



本研究におきまして、令和3年～5年の3年間、さらに、本年度も、千代田区より助成を頂き、研究活動が出来ましたことに深く感謝いたしております。これを機に、千代田区の帰宅困難者支援の施策に学び、学生のボランティアの育成、そのネットワーク化のために果たす大学の役割を、教職員が学生と共に語り合い、学びあう機会を持つことができました。防災・減災意識を高めることは、学生・教職員のお互いの命を守ることはもとより、家族、地域と共に、過去を生きてきたこと、また、これからを生きていくことへの期待と挑戦となっていくことでしょう。同時に、今年度から、千代田区キャンパスコンソの活動に専修大学が加わり、本共同研究事業を通して、連携を強化することができたことも財産となりました。

本研究を進めるにあたり、千代田区 地域振興部 コミュニティ総務課、政策経営部災害対策・危機管理課の皆様には、研究事業の遂行を多面的にご支援いただきました。心より感謝申し上げる次第です。また、私たちの研究活動を支援し続けていただきました関係者の皆様のご理解とご協力に、この場をお借りして深甚の謝意を表したいと存じます。

今後も千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）の活動にご支援・ご指導の程、よろしくお願ひ申し上げます。

執筆者（50音順）

- 伊藤 マモル 法政大学 法学部 教授
(第2章 第2節)
- 小林 貴徳 専修大学 国際コミュニケーション学部 准教授
(第5章 第1節・第2節)
- 酒井 治子 東京家政学院大学 人間栄養学部 教授
(第1章、第3章 第4節、第4章 第2節、まとめと今後の展望)
- 富永 曜子 大妻女子大学 短期大学部 家政科 准教授
(第4章 第1節)
- 谷島 貫太 二松学舎大学 文学部 准教授
(第2章 第1節・第3節、第3章 第1節)
- 深津 謙一郎 共立女子大学 文芸学部 教授
(第3章 第2節)
- 堀 洋元 大妻女子大学 人間関係学部 准教授
(第3章 第3節・第5節)
- 渡辺 明日香 共立女子短期大学 生活科学科 教授
(第3章 第2節)

(所属は2025年3月現在)

MEMO

MEMO

令和6年度 「千代田学」に関する区内大学等の事業提案制度 共同事業 報告

大規模災害時における学生ボランティアの育成と、

ネットワーク化に関する研究

令和7年（2025）3月

「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（千代田区キャンパスコンソ）」

幹事校 東京家政学院大学 人間栄養学部 酒井治子

〒102-8341 東京都千代田区三番町 22 番地

Tel:03-3262-2251



千代田区キャンパスコンソ

Chiyoda Campus Consortium